



## 「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第1回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。  
一部の個人名をアルファベット表記しています。

### 「私とT先生の茶道研究」

河南省 李師荀

私は外国語学部に所属する一大学生であるが、学部にはKT先生という日本人教師がおられる。彼は五十数歳で、中国に来て5～6年になるが、流暢な中国語を話すことができる。T先生は、背は高くないが、恰幅が良く、髪は少し薄くなっている。日本人男性に特徴的な綺麗に髭を剃るというようなことはしていないので、見た目で中国人と誤解されやすい。

以前、学部内の行事でT先生を招いての和服文化講座があった。私はイベント責任者のひとりだったので、講座の具体的な内容を相談したいと思い、T先生のお宅へ伺った。まさか、そこから私が茶道を始めようとは思ってもいなかった。

その日、私はだいぶ早くT先生のお宅に着いていたが、約束の時間まで呼び鈴を鳴らさず待っていた。呼び鈴を鳴らすと直ぐに現れたT先生は、淡い青色の和服に下駄といういでたちで、笑みを浮かべて挨拶して下さった。今回お伺いする目的は事前に電話で伝えてあったが、まさか本当に和服を身につけて出迎えていただけるとは！私は少しの間、口にすべき言葉も思いつかず、ひたすら頭を下げていた。T先生にどのように応接間へ通していただいたのかもまるで覚えていない。

応接間に入って腰を下ろし、あたりを見回してから気づいたことだが、先生のお宅はかなり中国的になっていて、板の間と壁掛けの浮世絵だけが日本の風情を醸し出していた。その時、先生は冷蔵庫から飲み物を出してきて、涼をとるようにと勧めて下さった。

それを受け取った時、素晴らしい茶道具と信陽毛尖(白茶)の箱がふと目に入った。閃いた！祖父母が茶を嗜んでいたため、私は小さい頃から簡単な茶芸を学んでいたのである。そして、T先生に点前を披露して先ほどの失態を挽回しようと思いついたのだ。そこで、「先生は中国にいらして長いので、きっと中国の茶文化もよくご存じでしょう。お茶がお好きということは存じあげております。私も少しは中国茶芸の心得がありますので、一度お茶を差し上げたいのですが。」と声を掛けてみた。

先生はそれを聞くとさらに笑顔を輝かせ、茶道具やら熱湯やらを急いで用意して下さった。それから、私の出番である。ポットを温め、茶葉を入れ、熱湯を注ぎ、蓋の上から更に熱湯をかけ、茶杯を温め、注ぎ分ける、首尾一貫した動き！その間、私は長年修業してきた“鳳凰三点頭”、“関公巡城”、“韓信点兵”の“技”を特別に披露した。注いだ信陽毛尖からたちまち芳香があふれ出し、茶葉がすらりと美しく立つ！

先生は呆然としてご覧になっていたが、親指を立てて見せ、実にすごいと賞賛して下さった。私自身も、かなり満足していた。内心、私ごときの不完全な技でさえT先生を震撼させられるのだから、中国の茶文化は奥が深いものだなと思った。思わず有頂天に！しかし、驚いたことに、先生は急に立ち上がると「ちょっと待っていてください。」と言うなり、子供のように寝室へ潜り込んでしまわれたのだ！およそ10分程して先生が戻られると、今度は私が呆然とする番だった…先生は大量の古めかしい茶道具を持ってくると、座卓の前に正座をされたのだ。その様子を見た私も、それに合わせて向かいに正座した。先生は笑いながら、「いいよ、いいよ、慣れていないなら、座っていて下さい。」と声を掛けて下さった。”

そして、先生は私に茶道具を一つずつ紹介して下さったのである。茶碗、茶入、茶杓、茶筌、柄杓、水差し、風炉、ふくさ等々。それから、先生は「今日は君に来てもらったのだから、君が客人です。さっきはお茶を淹れてもらって、申し訳ないことをしてしまったので、今度は私がお茶を点てさせていただきますよ。」と仰った。

そこからはT先生が茶道を披露して下さいました。初めに茶道具を盆の中から一つずつ取り出して、茶碗を拭き、湯を沸かし、抹茶を茶碗に淹れ、点てる。先生の動作はいずれも簡素なものだったが、茶道具を並べ、茶碗をささげ持ち、水を汲むといった一連の動作にかなりのこだわりがあることは見て取れた。特に、最後、右手の指を揃えて、親指と人差し指の間で茶杓を支え、ゆっくりと下に置き、茶碗を左手に乗せて、右手で何度か回してから差し出して下さったところでは。私は、日本の茶道に関係する知識を思い出そうとするのが精一杯だった。見よう見まねで碗を捧げ持ち、手のひらに乗せて回し、頭を下げってお茶を頂いてから先生に一礼した。

お茶を頂くと、私と先生との距離はかなり近くなり、会話もだいが楽になった。その午後、講座の細かい内容を相談する以上に先生と話し合ったのは、中日の茶文化にある相違についてであった。

私は「中国の茶文化は儒教が核となっており、『茶は礼儀と仁義によく、敬意を表すことも、正しい行いをすることも、志を高めることもできる。』と言われていています。茶道は自然美の追求であり、お茶を飲むことは精神的な喜びの一つです。老いも若きも、身分の上下もなく楽しめるものです！」と言った。

先生は、日本の茶道とは“和、敬、清、寂”、つまり人間同士の親睦と互いへの敬意、心の浄化、孤独に耐え落ち着いた精神の寛容を重んじるものであるということを紹介して下さいました。「茶は、禅と一体なんだ！」とのことである。茶道は作法が厳格で、質素で静寂な美しさを重んじ、高尚な芸術のひとつであり、その社会性と大衆性は未だ広く深くというレベルではないということだ。「先程のお点前でも、茶道具とご自身の素養には限界があり、日本の茶道の規範を完全に守っている訳ではないんです。」と仰った。私の茶芸を見てふと思いついたに過ぎないということである。「もし、本当の日本の茶道を見たいのなら、日本のお茶屋さんに行かないといけないよ！」とのこと。

おいとまする時、先生は感慨深げに声を掛けて下さいました。「今日は君と茶道の研究ができて、とても楽しかった。中日両国の茶道は結局どちらが優れているかの話については、中国の流行語に倣いたいと思います。中国の茶芸であろうと日本の茶道であろうと、淹れたお茶が美味しければいいんだよ！」

そう、中国の茶芸も日本の茶道も、それぞれの民族の伝統文化の精髓に完全に浸っているのだ！きっと中日両国の茶文化は、いずれも歴史の大きな流れの中でこそより輝くことだろう！中日両国民の友情も、ほのかに茶の香りと同様にすがすがしく永遠に香っている…